愛と心のネットワークづくり

平成１６年度「こんにちは！知事です」知事講話

平成１６年１１月１３日(土)

東温市中央公民館

知事に就任し、「共に創ろう誇れる愛媛」という基本理念の下で第一期県政を推進させていただきました。これは、愛媛県がみかん王国であると言われておりますように、いろいろな分野で日本一になっておりますが、もちろん、全ての分野で日本一になることはできない。そこで、愛媛らしさを発揮しながら、愛媛県の持っているパワーの範囲内で、無理をしないで、そして、県民が自慢できるような他の県から羨ましがられる愛媛を皆様方とともに創っていきたいという理念でございました。

第二期県政で掲げておりますスローガンが「愛と心のネットワーク」でございます。

大きな視点から申し上げますと、御承知のように、現在、国は、５００兆円という膨大で目のくらむような借金を抱えています。そして、４７都道府県と全国の市町村が、２００兆円という借金を抱えて、四苦八苦しております。国の財政自体も、借金を減らすことがほとんど不可能な状況で、これ以上借金を増やさないようにしていきたいということで、

内閣は、プライマリーバランスに留意して、借金の返済額を上回らない範囲で借金をしていこうという当面の目標を掲げております。言うなれば、国、地方の７００兆円の借金は返済不可能だが、これ以上借金を増やさないようにしよう。そして、その目的が達成された後に、経済の復興などにより、借金を返せるようなシステムをつくっていこうということでございます。

　これまでの地方財政は、国に依存しておりました。愛媛県の場合も、今年度の当初予算の総額は、６，４４１億円でしたが、９月議会で、先般の災害復旧の経費等として、１８９億円という補正予算を組みました。こういった経費はどのように賄われているのか大雑把に申し上げますと、県の財政を賄っている財源としての県税収入はわずか２割でございます。その他に、高等学校の授業料、いろいろな手続きの手数料、県の施設の貸与料といった収入が約１割です。これを例えるならば、愛媛県が１００万円の生活を営んでいるにもかかわらず、収入は３０万円しかない。このような生活です。残りの７割は、どこから来ているか。愛媛県民の必要最低限の生活を保障するために、国から約３割に当たる地方交付税が来ております。この他、国から義務教育費国庫負担金などの様々な補助金が約２割で、合わせて国から得ているお金が５割です。残り２割のうち、１割強が、県が借金をして賄っています。その他は、過去に蓄えていた貯金の取り崩しとか、様々な工夫をして、生活をしている。これ

が現状であります。

　これは何を意味しているか端的に言いますと、愛媛県など地方の住民の生活は、東京都民が払っている所得税、あるいは、東京都で企業が払っている法人税、そういった税収の大部分を東京都民のためではなくて、愛媛県をはじめとした貧しい地方に仕送りをしてもらっている、このような状態で成り立っております。これまでは、小さな村でも、その村が成り立つためには、村長さんが必要であります。助役も、収入役も、村会議員も、村役場の職員も、集会所も、火葬場もそれぞれ必要でしょう。浄水場、汚水処理場も必要でしょう。いろいろなことは、全て自主財源で賄いきれませんから、国からのお金で賄ってきました。このことについて、東京都民からは、都市部の反乱とは言いませんが、何で俺たちの税金が、山の中や島の方へ全部流れていくのだというような意識の変化が起きております。こうした中、それぞれの自治体が国の手助けなく、自分の足だけで立って、生きていくことは不可能ですが、せめて、まだ力があるならば、自分の足で立って、足らざるところを都市部から補ってもらう。自立することと支援してもらうことの調和をどこに見出していけばいいのかということについても考えていく必要があります。

　それから、なぜこのように国家財政、地方財政において、借金が増えたかと言いますと、かつては、景気が悪くなると、世の中を良くしろと言うものですから、景気浮揚のために、大量に国債を発行し、借金をし

ながら、公共事業を実施して参りました。全国的に、土木建築工事が景気浮揚策として用いられましたが、その財源は全部借金ですから、返していかなければなりません。しかし、こうした手法のためにいくら予算をつぎ込んでも景気が良くならない。これ以上借金を続けて景気を浮揚しようとしても、あまり効果がでないということが、大きな問題になっています。

　そして、最近、国家財政、地方財政を圧迫しているものは、年金、医療、福祉、保健、介護といった社会保障と呼ばれる分野の経費で、国の経費では、毎年１兆円程度ずつ増えています。都道府県と市町村を合わせた経費でも、毎年、ほぼ同額の１兆円程度支出が増えています。ところが、歳入は全然増えません。むしろ不景気だから減少しています。となると、そういった社会保障経費を賄うために、また借金を繰り返さなければいけない。毎年、国、地方を通じて、２兆円ずつお金が必要になるのですが、今は歳入としてお金が入って来ないから、経費の全部を借金で賄うという仕組みになっております。かつての高度経済成長の時代には、景気が良ければどんどん税収が入りますので、あれをしましょう、これをしましょうと約束して事業がスタートしました。一回始めた制度は簡単にはやめられません。今までこれだけの補助金が支出され、これだけ手厚いことをしてくれた。隣の町では、こうなっているではないか、それでは、うちの町もということで、国が何とかしろ、県が何とかしろ、

市町村が何とかしろ、というように皆が行政に頼る。ああしてほしい、こうしてほしいという願いをかなえてきた結果が、借金だらけの財政になっているという現状であります。

　これからも、赤字財政を続けていくならば、自分たちは良い思いをして、これから生まれてくる子供たちや孫たちに借金返済のつけを回すことになるのだということ認識し、これを改めないといけない。

　そのためには、何をすればいいかということを考えてみると、今までの行政依存を脱して、自分たちで互いに助け合って支え合う社会をつくっていくことが必要ではないかということで、こうした考えが私が提唱している「愛と心のネットワーク」の概念でもございます。これを考える契機となりましたのが、平成７年に発生した阪神・淡路大震災です。あの時は、全国から多くの若者が災害復旧のために手弁当で駆けつけてきました。その時、ああ日本はまだ捨てたものではないなという気持ちを持たせていただきました。

　私が知事に就任した時、当初、電子メールその他で寄せられた要望のほとんどは、あそこがゴミで汚れている、川が汚い、何とかしろ、道路が汚れっぱなしだ、流木が流れ着いて海岸が汚い、何とかしろ、このようにすべて行政がほったらかしているのだという話でした。もちろん、県財政が豊かであるときならば、そういう要望に対しても、全部予算を組んで、業者に頼んで、きれいにすることはできます。でも、阪神・淡

路大震災の体験から、県の管理する河川、道路、港湾・海岸、この三つについては、愛媛県民の財産だという意識をもって、皆さんに助けてもらいたいということで、愛ロード制度、愛リバー制度、愛ビーチ制度をつくりました。これらの世話をするということで手を挙げていただける団体はいらっしゃいませんかという募集をした結果、１０月１日現在で、１８９団体、約１万５千人の方々に協力していただいております。愛媛県民の１％に当たる方々がこうした活動に参加していただいている。人口のわずか１％ですけれども、自分たちが、手弁当でこの川をきれいにしましょう、この道路をきれいにしましょうと名乗り出ていただいたことは大変うれしく思いました。

　こうした試みを通じて、愛媛県民も、チャンスときっかけさえあれば、自分たちの余裕のある時間とエネルギーを、困っている所に注ぎ込みたいという気持ちを持っていらっしゃる。更に、実は、これまでも、そういうチャンスを待ち望んでいたのだけれど、自分一人だけではどうしようもなかったけれど、こういうことに参加できるシステムがあるのならやってみようという気持ちを持っておられ、そのことに喜びを感じるということが原点となって、「愛と心のネットワーク」という概念を提唱いたしました。

　新居浜市での集中豪雨では、土石流でかなりの汚泥が多くの家庭へ流れ込んで、土の除去その他の災害復旧で被災者の方々は、大変困惑して

いる状況でありました。豪雨があった時、私はちょうど、新潟市で開催された全国知事会に出席していたのですが、会議の帰りの夕方に新居浜市へ行き、被害の状況を見せていただきましたが、床上に積もっている泥を除去するのはとても大変な作業だなということを感じました。愛媛県庁職員がボランティアで災害復旧の手伝いをしてもらえるとありがたいなということで、ボランティアを募りました。そうしたら、その週の土曜日、新居浜市での災害復旧活動に約５００人のボランティアが従事されましたが、そのうち、半分近い２２７名が県庁職員でした。声を掛けられれば、やってやろうという気持ちを持っている。県庁職員の中にも私の提唱する「愛と心のネットワーク」の精神がだいぶ浸透してきているな、そんな感じもいたしております。

　これまでならば、行政は、一体何をしているのか、どうにかしろと言われているところですが、ボランティア活動に参加された方々によって発揮された大きな力に助けられているという点がございます。その様子を見てみますと、もちろん、助けられる被害者の方々も喜んでおられますが、ボランティア活動をする人自身が、自分たちの活動によって、住民が喜んでくれている、自分たちは社会貢献をしていると喜び、それが人生のいきがいの一つにもなり得ているように思えます。今回の新居浜市での状況からも、民間においての機運の盛り上がりが見られる時代になってきていると思います。

「愛と心のネットワーク」の基本概念は、実は、今の少子高齢化の中で、みんなが助け合うことで何ができるのかということです。

一つは、介護保険であります。平成１２年に介護保険制度がスタートしました。それまでは、痴呆のお年寄り、障害を持つお年寄りは、家族が家庭で自分の生活を犠牲にしながら、親のためにと、心身ともに疲労困憊しながら介護してきました。施設へ預けようと思ったら、多額の経費を投入しなければ入所できない。そんな悩みを解決するのが介護保険制度で、大変、喜ばれている方が多いと思います。ところがこの制度がスタートしました平成１２年の愛媛県での介護給付の支給額は約５百数十億円でしたが、１年毎に１００億円ずつ支出が増えているのです。名前は介護保険ですから、保険料で賄われていると理解している方が圧倒的ですが、実態は保険ではないのです。例えば、あるお年寄りを抱えた方が介護保険制度の適用を受けて、要介護認定を受け、介護給付を受けます。それが在宅介護の場合であれば、月平均１０万円、施設へ入れれば、月３１万円という経費がかかっており、５０％は税金で賄われています。５０％うち、２５％が国の税金、１２．５％が県の税金、１２．５％が市町村の税金です。残り５０％のうち３２％がいわゆる通常の健康保険の分野で支払われており、４０歳から６４歳までの働き盛りで介護を受ける必要がほとんどない人たちが１６％を負担し、その人を雇用している企業が１６％を負担しています。一方、６５歳以上のお年寄り

が払う介護保険料は１８％です。こういった制度ですから、介護給付が増えるたびに、国、県、市町村、それからサラリーマン、企業へのつけ回しが増えて、どんどん膨れ上がっていきます。

　お年寄りの介護を１００％家庭で行おうとするのは大変なことです。でも、介護保険制度が出来たから、介護は１００％この制度でいきましょうというのもちょっと極端すぎるのではないかなと思います。私は、可能な限り、自宅で面倒を看てあげることが何よりで、今まで生活してきたお年寄りにとっては、住み慣れた自分の生活が第一なのです。ただ、介護の負担には限界がありますから、自分の家族で、あるいは地域で看ることができないのであれば、介護保険制度に頼るのも止むを得ない。しかし、保険に頼るとしても、せめて、五分五分ぐらいの割合で半分は自助努力によることが妥当ではないのかなと。まず、家族は、自分たちで出来る分野は何なのかを考える。ここは介護保険に頼らず自分たちでやりましょう。あるいは、地域のボランティアの助けを借りながら、地域で面倒を看ましょう。その上でどうしても対応できないものは、介護保険の世話になりましょう。そういった形で考えていかない限り、この負担はどんどん増え続け、国の負担、将来にわたる借金になっていくなという感じがしております。言うなれば、地域のお年寄り、痴呆の方、あるいは、障害のある方を、家族、近所の人、ボランティアが協力し、助け合っていく、そして、その力の及ばない分野はまさに介護保険で給

付を受けるというシステムにしていかなければならないという考え方です。

　今後、お年寄りがどんどん増えますけれども、子どもはどんどん減っていっています。現在の合計特殊出生率は、１．２９と言われており、夫婦の間に生まれる子どもの数が１．３人しかいない。人口はどんどん減少します。つまり、これからは、働いて税金を払っていただく人、保険料を払っていただく人の数がどんどん減少していくのです。一方、給付を受けなければならない人が増えていく。そんな中にあって、少子化により、子育てが出来ない環境、社会になってきている。子育てを自分たちだけではなくて、地域の人が手助けをしてくれれば良いのです。何か困ったとき、例えば、ちょっと熱が出たぐらいの場合であれば、親が仕事を休んで面倒を看なくても、地域のボランティアが看てあげますよというような形で手助けがなされ、親の負担が軽減される、安心して子育てが出来るような、子どもを生んで良かったというような社会づくりをしていく必要があるのではないのかと思っております。こうした社会づくりは、私の申し上げる「愛と心のネットワーク」の具体化の二つめであります。

　「愛と心のネットワーク」で何ができるのかということについて、今日、皆様方にお配りしている資料（「愛と心のネットワーク」）の裏側に１０項目の例を挙げております。

冒頭に申し上げましたように、何でも介護保険に頼るのでなくて、地域でお互いに支え合ってもらえないのかというのが、左側の欄の上から２番目の「高齢者支援」といった分野であります。これは、ヘルパーの資格を持たれれば、一番いいでしょうし、資格を持たなくても出来る事柄であります。そして、今、申し上げたのが、左側の欄の上から３番目の「子育て支援」という項目であります。

更に４番目が「障害者支援」です。障害を持つ方は障害を持つがゆえに、今までであります、いろいろな施設に入所されておりました。しかし、これにも、年齢の制限があります。家庭に居たままの状態では障害者の方々はだんだん孤立していくし、家族の負担も大きいので、それを地域で一緒に支え合っていけないのかどうか。皆さんにはこの社会を構成する一員として、障害者の方々も共に手を携えて生きていけるような社会づくりに協力してもらいたい。行政が施設をつくって、そこに障害者に入所してもらう。障害のある方を、隔離するのではなくて、一般社会の中で地域の人々と共に生きていくようなシステムづくりが出来ないかと思うのでございます。

先程申し上げた「愛リバー」制度が右側の欄の上から３番目の「河川美化活動」であります。このことは、道路や海岸でも同じであります。

ある会合がありましたときに、見せていただいて、私がいいなと思ったのは、京都府の福知山市にある観音寺の住職さんがつくられたという

詩です。それは、「自分だけと思ってごみを捨てる。地球上で一億余りのごみが落ちる。自分だけでもと思ってごみを拾う。地球上から一億余りのごみが消える。」という非常に短い詩でありますが、なるほどなと思いました。世の中には地域の環境を汚す人が必ずいます。汚した人がいても、それを片付ける人がいれば、きれいになるのです。空き缶が転がっていたり、ペットボトルが転がっていたり、キャンデーの包み紙が投げ捨てられていたりということがあると思いますけれど、この詩の言葉のように、捨てる人がいる以上は、誰かが拾う役割をすればきれいになるのです。だから、愛媛県にはごみが落ちていない、きれいなまちだなと全国から感心されるような、そんな愛媛県になれないのかなと。「公園管理」は一つの例でございます。

　それから右側の欄の上から４番目が「自主防災組織」です。これは、今回の台風災害等でも、地震でもそうですが、これからいろいろな災害が起きる場合に、消防団がやってくれる、自衛隊が出動してくれる、というように行政にだけ依存するのではなく、自分たちで、無報酬での防災活動に取り組み、何かあった時には皆が助けに出ますよというような仕組みをつくることが出来ないか。困ったときに消防団や自衛隊が対応してくれるのだということだけではなくて、地域のみんなが、必要があれば、臨時消防団員になるというぐらいの組織を作り上げていただけないかなということでございます。

同じことが右側の欄の１番上の「農村支援」で、これは、古い時代の日本にはどこにでもあったものでした。農村の集落で、田植えの時、あるいは、稲刈りの時に、地域の人々が総出で、自分の田んぼだけではなくて、皆がお互いに助け合って作業する仕組みは、日本古来の伝統としてあったものです。これが続いている地域もありますので、これをもっともっと広げていくことはできないのか。

それから、次の「商店街振興」ですが、どんどん大型店が進出して、地域の商店街がさびれていくのを、皆様も御覧になっていると思います。その商店街をどうしたらいいのか。空き店舗を活用した商店街振興に向けてボランティアによる取り組みができないだろうかと。

言うなれば、行政に依存して、税金を使い、将来の子孫へ借金を付け回しにするということでなくて、可能な限りみんなの手で、助け合っていく社会がつくれたらいいという考えが「愛と心のネットワーク」で、この資料で、そのモデルを掲げております。これ以外にもあらゆる分野で、たくさん取り組めることはあると思います。自分はもう生活に手一杯、仕事に精一杯で、とても余力がないという人にまで求めているわけではありませんが、振り返っていただければ、多くの方は、自分の人生において、余裕のある時間、エネルギーを自分の趣味、あるいは、楽しみ、家族団らんのために充てていると思います。大切なことは、それを自分のために１００パーセント使うのではなくて、もし、余った時間が

あるならば、それは週に１日でもいいし、あるいは、１日のうち１時間でもいい、自分のために使うエネルギーの半分なり三分の一を人のために使っていただけませんかという考えが「愛と心ネットワーク」の基本であります。みんなが支え合ってすばらしい地域社会をつくる、全国の範となるような愛媛県をつくる、そのようになればいいなという願いを込めて、「愛と心のネットワーク」ということを提唱させていただいております。これは押し付けではありません。ボランティアというのは、本人の自由意思によって決める事柄でありますから。

一般的に、ボランティアは、自分の自由意思で、無償で働くという意味で使われております。しかし、ボランティアという言葉自体は、ラテン語の「Voluntarius」という言葉からきています。元々のVolunというのは、自由意思を意味しており、ボランティアとは、自分の意思で動いている人のことを言うのです。ですから、有償、無償は、元々、関係のないことだったのです。百数十年前に、イギリスで、海兵隊員を募集した時に、ボランティアという言葉が使われました。ボランティアで応募した人は、徴兵制で来た兵隊と同じように給料をもらって、同じ処遇であり、無償ではないのです。海兵隊員になることをボランティアとして呼びかけた時に使われたスローガンが、" One volunteer is worth two pressed men."という言葉です。義務として徴兵されて軍務に服している兵隊さん二人よりは、自分でやりたいと思って応募した一人のボランテ

ィアのほうが、値打ちがある、よく働いてくれるという意味で、元々ボランティアには無償の概念はなかったのです。

私は、ボランティアの在り方は何通りもあっていいと思います。完全無償のボランティアがあってもいいし、交通費だけ支給してもらうボランティアがあってもいい。通常１日５千円の報酬が出る場合であれば、私は、１日２千円でいいですよというボランティアがあってもいい。様々な形のボランティアの組み合わせが考えられ、その人が提供できる支援内容と時間でこれくらいの経費、それは、自分が活動した分の貢献の度合いだと思いますので、その分はもらいたいというものがあってもいいでしょう。全てのこと、１００パーセントを行政サービスに依存するのに比べれば、財政悪化の防止に大きく役立つわけでもあります。

ちなみに、ボランティアという概念の中で、もう一つ面白いものがあります。これは、人の借金を肩代わりし、返してあげる人ということで、これもボランティアの概念に入っています。そういう意味では、先般、福井県の豪雨による災害の復旧時に、２億円の宝くじが当たって、その当選金を寄付された方がいらっしゃいましたが、その方は、英語でいう意味の典型的なボランティアなのです。

このように、ボランティア概念は、自分のためではなく、人のために自分の範囲内でできることを行うということで、その方法はいろいろとあります。

自分にはこんな特技がある、この時間なら余裕がある、土曜日の午後だったら時間が空きますよ、自分はこれができますよという、いわばボランティアの供給分野と、助けを求めている需要分野とがマッチングができるよう、うまくコーディネートすることによって、愛媛県民が全て一つの家族だというような社会をつくることができればいいなというのが、「愛と心のネットワーク」の目指すところでございます。